

エーファ・ボッケンハイマー博士の報告への質問とコメント

島崎 隆 2017年10月 1日 東京 駒澤大学

本日の研究会議「ヘーゲルとマルクスの著作における観念論、唯物論、弁証法の関係について」に参加することができ、ならびにボッケンハイマー博士と議論できることは、私の大きな喜びです。

どの点にヘーゲルとマルクスの方法的アプローチの差異が存するのか、そして何によって「観念論的」弁証法に対立する「唯物論的」弁証法が特徴づけられているのかという問い、だからまた、マルクスによればヘーゲル哲学の「合理的核心」はどこに存するのか、そしてその「神秘的外皮」とは何かという問いを取り扱うことは、私にとって非常に興味深いことである。それは、かつて私が課題としてもっていたものであり、長年の間、考えてきたものである。

ヘーゲル弁証法、マルクス弁証法のような方法的問題は、わが国では、唯物論的またはマルクス主義的研究者によっておおいに議論されてきた。それはとくに戦後のことであり、さらにソ連・東欧の既存社会主義の崩壊の時代に生き生きと議論された。しかし現在では、こうした方法論的な問題に関心をもつ研究者は残念ながら少ない。

こうした研究者は今日では、次のようなテーマを取り扱ってきた。たとえばそれは、疎外論と物象化論、およびその関係であり、マルクスのアソシエーション論のテーマであり、市民社会や民主主義のテーマであり、直接的に、グローバル化した新自由主義的な資本主義への現実的批判(多種多様な社会問題を含めて)、新メガの詳細な文献学的研究、環境問題に関する哲学的・社会科学的な研究などである。一言でいうと、「哲学」の立場がますます下落してきたし、そうなっている。

したがって、ボッケンハイマー博士の報告の内容は、以前私が熱心に研究してきたのとまったく同じものであり、そのさいに私は、ソ連の論理学論争以来、社会主義国家の著作のみではなく、ヨーロッパやアメリカの諸国の著作を詳しく読んできた。

私はこれから報告の内容について質問し、自分のコメントを付け加えたい。それは六点からなる。

1 そもそもヘーゲル観念論とは何か？

さて私は、氏の報告がヘーゲル哲学の性格を正しく認識していると信ずる。そして、へ

ーゲル弁証法を理解しようとするならば、まずはヘーゲル「観念論」の本質を解明しなければならない。それが議論の正しい順序ではないだろうか。観念論とは何か、とくにヘーゲル独自の観念論とは何か。なぜヘーゲルは、(絶対的または客観的)観念論を意図的に主張しなければならなかったのか。そこには、理性的な根拠がないのだろうか。マルクスが実際に遂行したように、ヘーゲルを内在的に批判しなければならないのではないのか。こうした問題提起は、「合理的核心」「神秘的外皮」「転倒」という問題群と密接な関係をもっていると信ずる。私見では、ヘーゲルが「観念論」という立場の確実性を擁護したのならば、哲学史の立場からして、十分な理由が存在したのである。

私は以下にその点の説明を試みたい。そのときに私はヘーゲル哲学を「精神の哲学」と呼称するが、そのさい「精神」ということばのもとで、単に人間の本質やその主観的活動性を理解するのみではなく、さらに客観的に、外的な物質的対象の本質もまた理解する。そのときいえることは、すべてのものはヘーゲルによれば、本質的に精神的実在であり、ここにただちに「転倒」が正当にも見いだされるとしても、そうなのである。それは、「思考と存在の同一性」という、伝統的形而上学のテーマに由来する。しかしヘーゲル観念論は、もっとダイナミックである。「観念論」ということばは、「観念性」「観念化する」「観念化」「止揚」「還帰」「同化」などのことばと密接な関係をもつが、そのもとで、客観的対象の内的な、ダイナミックな、運動をはらんだ構造が理解される(社会における人間的な客観的な体系やシステムのみではなく、自然的事物の構造もまた理解されるのである)。

したがってヘーゲルにおいては、弁証法は、観念化の機能と活動としてみなされる、対象のこうした客観的運動を意味する。もちろんこの運動をはらんだ観念化は、思考過程によって把握されるのであり、そのさい、「思考と存在の同一性」が実現される。万物は精神の、不可視の観念的運動の成果であり、その運動を精神の哲学は主張するのである。従来の唯物論は、対象の、この内的な、深い構造と運動を把握できなかつた。ここですでに、観念論と弁証法はいつも結合しており、むしろ癒着している。フォイエルバッハがヘーゲルの観念論を批判しようとしたときに、同時に彼は、弁証法をも批判しなければならなかったが、それは長い哲学史的伝統に由来したものである。

こうして、ヘーゲルは述べる。「あらゆる哲学は本質的に観念論であるか、または観念論を少なくとも原理としてもつ。」(TW5, *WdL1*, Suhrkamp, S. 172.) なぜだろうか。唯物論と実在論が対象をありのままに認識しようとはせず、対象の内的な構造と運動を批判

的により深く認識しようとするならば、唯物論と实在論が一種の観念論になったということができる。というのも、そこに観念化の機能が存在するからである。「精神の概念に属する外面性の止揚は、われわれが精神の観念性と呼んできたものであり、…まさにこの還帰によって、外面性のこの観念化または同化によって、精神は精神となり、精神なのである。」(TW10, *Enzy.*, III, Zu. S. 21.) 思考過程におけるこうした観念化の機能を、実際まさに、弁証法的とみなすことができないのだろうか。この場合、観念論と弁証法は、相互に切り離しがたく結合し、癒着している。

マルクスによれば、対象の本質と運動を正しく反映する認識過程の弁証法的運動は、たしかにヘーゲル哲学の「合理的核心」である。これにたいして、すべてが精神であるか精神的と見る思想は、「神秘的外皮」であり、それは結局、神または宗教を肯定的に受容するものである。

ヘーゲルでは、たしかに観念論的な「転倒」があるが、彼が客観的な運動過程と主観的な認識過程を相互に混同したということとはできないであろう。マルクスが主張するように、「現実を、自己自身を自己のなかで総括し、自己のなかで深め、自己自身から運動する思考の結果としてとらえるという幻想」をここで見いだすことができるのだろうか。ヘーゲルによって「客観的精神」と呼ばれる社会は、自己のなかに、本質から現象へと運動し、自己を再生産し、自己発展するなどのダイナミックな構造をもっている。したがって対象は、単に実体であるのみではなく、一種の主体でもあり、したがって主体—客体の構造をもっている。

同様に、理念、概念、普遍、思考などの他の表現もまた、精神または観念性の場合と同様に、二義的であり、そのときそれらのものは、一方では主観的であり、他方では客観的である。さて古代ギリシャ哲学では、アナクサゴラスが、世界の客観的原理として、ヌースの、理性の思想を主張した。「理性」はしたがって、主観的でもあり、客観的でもある(TW18, *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*, S. 369.)。理念も同様な事情にあり、「概念の自己運動」すらも私見では、単に主観的なだけではなく、客観的な意義をもっている。

報告では(S. 14)次のようにある。「したがってヘーゲルでは、マルクスによれば、思考過程は理念として自立化して、…’現実のデミウルゴス’になる。」(MEW, Bd. 23, S. 27)しかしヘーゲルによれば、理念、思考がなお客観的意義をもつのであれば、ヘーゲルの思想はそれほどおかしくはない。客観的理念は、マルクスが『資本論』で資本主義社会を

そう叙述しているように、それはいわば「デミウルゴス」として、自己自身を産出し、再生産する構造を内包する。「あとがき」で弁証法的方法を説明しようとしたとき、マルクスは自分自身が貫徹した認識論的な仕事をすでに忘れてしまったかのように、私には見える。

2. そもそもマルクスの唯物論とは何か？

マルクスの弁証法とは何かということの前提として、同様に、そもそも唯物論とは何か、とくにマルクスの唯物論とは何かを理解すべきである。そのあとで初めて、マルクスの唯物論的弁証法とは何かを把握することができる。こうした私の見解をどう考えるのか。

「マルクス主義的哲学」「弁証法的な唯物論哲学」という概念と「唯物論的・弁証法的方法」という概念とは、第一に同じではない。このような混同は、国家哲学としてのマルクス・レーニン主義の哲学に由来し、この哲学は、いわゆる科学の方法論主義を自分のなかに内包している。もしそうであるならば、ソ連、東欧における社会主義のイデオロギーとしてのマルクス・レーニン主義の哲学を真面目に吟味し、批判しなければならない。このさい、このイデオロギーは、既存社会主義の崩壊の一原因として、否定的役割を演じてきた。この意味で、オリジナルのマルクスの哲学またはその世界観を、マルクス・レーニン主義と区別して、さらにまた「西欧マルクス主義」「実践の哲学」などと区別して、原理的に再構築することが必要である。それとの関連で、日本では世界大戦のあとに、マルクス・レーニン主義またはスターリン主義への批判によって、「主体的唯物論」または「唯物史観主義」のような傾向が現れた。既存社会主義の崩壊という事実と対決したのちに、いかにしてマルクス主義哲学を正当に根拠づけられるのだろうか。

私はここで、「実践的唯物論」の発生の事情を説明したい。東独において60年代の半ばに、実践的唯物論についての論争が起こった（A. Kosing, H. Seidelら）。そのときに議論が激しくおこなわれた。この論争はわが国にただちに翻訳され、まもなく集中的に議論された。しかし、こうした東独の論争は、ソ連と東独の政府によって抑圧されてしまった。私見では、ここで東独哲学の生命力は失われてしまった。ソ連では、例外はあるが、こうした議論はほとんど起こらず、その代わりに従来のマルクス・レーニン主義があいかわらず残った。ところでこの論争では、世界観を現実形成するために、実践概念の位置価が問題となった。従来は物質と意識という二つの概念が存在して、これら両概念の規定的順序が考慮に入れられた。このことは、エンゲルス『フォイエルバッハとドイツ古典哲学の

終結』に由来した。物質が第一義的であるならば、唯物論の立場がそこにあり、それとは反対の場合、観念論の立場がある。これが、「(近代の) 哲学の根本問題」をなす。しかし、認識は結局、実践生活の産物であるから、実践なしでは、ひとは本来的に世界に接近ができない。そこで、物質、意識、実践のあいだで優先順位についての激しい議論が生じた。中国のある研究者は、この場合に、誤謬の原因として三つの古典的著作を列挙した。つまりエンゲルス『フォイエルバッハ論』、レーニン『唯物論と経験批判論』、スターリン『弁証法的唯物論と史的唯物論』であり、それは非常にラディカルで興味深いことである。

私はここで、実践的唯物論の内容についてただ手短かに説明したい。その考えによれば、史的唯物論がこの世界観の核心をなし、そのさい、資本主義批判が中心になる。それにたいして、自然弁証法は、自然の進化論を含めて、この世界観の基礎である。両者〔史的唯物論と自然弁証法〕は、人間的実践によって相互に結合されることができる。認識論、方法論などは、それが必要であるとはいえ、ここでは二義的である。新しい唯物論としてのこの立場は、従来の唯物論と観念論を統一へとたらず（フォイエルバッハ・テーゼの第一）。そのさいの実践的な主要目標は、共産主義を構築することである。

3. ヘーゲル弁証法とマルクス弁証法の差異はどの点にあるのか？

ヘーゲル弁証法とマルクス弁証法の差異はどの点にあるのかという問題を、ひとは唯物論と観念論の区別を通じてようやく説明することができる。

しかしまずは、ヘーゲル哲学とマルクス哲学の、ならびにまたヘーゲル弁証法とマルクス弁証法の大きな共通性を示すべきである。これとの関連で、報告が手短かに「自由」に言及するように、人間的自由の問題は、ヘーゲルおよびマルクスにおける主要対象である。しかしここでは、その問題を議論することを控えたい。

「転倒する」という表現はひとつのメタファーであるのだから、ヘーゲル自身を実際に転倒することはできない。そのさいひとは、「その基礎において」（マルクス『資本論』第一巻第二版へのあとがき）という表現が何を意味するのかを、まずは理解しなければならない。そのもとの、唯物論と観念論の立場を直接的に理解することは、正当ではないだろうか。もしそうであるならば、観念論と唯物論というイデオロギー的立場がたしかに異なっているとはいえ、ヘーゲルとマルクスにおいて、弁証法の論理そのものが同一であるという可能性が存在する。しかしそれは、説得的な意見であるだろうか。それでも私は、

それを疑っている。

私見によれば、立場の差異は、ヘーゲル弁証法とマルクス弁証法のあいだの同一性を見いだせるとしても、弁証法的論理学それ自身の性格にまで浸透しているであろう。しかしそれでも、期待に反して、この区別を明らかにすることはむずかしい。したがって、この報告から、それを見いだすことを試みよう。さて、ヘーゲル弁証法では、現実の肯定的・体系的側面が基本的に優位であり、それにたいして、マルクス弁証法では、否定的・批判的・歴史的側面が基本的に優位である。だからヘーゲル弁証法は保守的であり、究極的目標として、テオリア、理論をもつ。それにたいして、マルクス弁証法は基本的に、革命的かつ実践的である。

『精神現象学』序論におけるいわゆる「実体＝主体説」の立場からすると、ヘーゲルでは、この実体＝主体は絶対的精神であり、マルクスでは、それは相互に交通しあい、協働する「現実的諸個人」（『ドイツ・イデオロギー』）であろう。

4. 歴史的なものとの論理的なものとの関係はどうか？

ヘーゲルとマルクスにおける歴史的なものとの論理的なものをいかに評価するのか。報告が言及するように、ヘーゲルは論理的なものを、マルクスは歴史的なものをそれぞれより重要とみなすが、それは私には説得的である。

歴史的なものとの継起と論理的なものまたは体系的なものとの継起の同一性を、ヘーゲル自身は『哲学史講義』において、現実には貫徹することはできない。部分的に、とくに古代ギリシャ哲学において、それを実現するのみである。ヘーゲル主義者であるA・シュヴェーグラーは『西洋哲学史』（上巻、岩波文庫）で、この点でヘーゲルを詳細に批判する。しかしまず、認識過程における両側面〔歴史的なものとの論理的なもの〕の相互浸透と相互前提を考慮することが重要である。そのさい、両側面はつねに必要な。氏の報告は、私と同じ意見だと信ずる。

ヘーゲルでもマルクスでも、この問題はかなり複雑であるので、さらに詳細に話を進めたいと思う。ヘーゲルは『法哲学講義』（TW7, §3, S. 35.）で、とくに国家論に関連して、「歴史的根拠からの発展」と「概念からの発展」を非常に厳密に区別する。こうした区別をどう評価することができるのか。哲学史における歴史的継起を扱う場合と、法哲学における論理的な体系叙述を扱う場合と、その差異に由来するのだろうか。

マルクスは『経済学批判要綱』序説でこの問題について書いているが、それは私には理

解することがむずかしいものである。まさにマルクスは、上記のヘーゲル『法哲学』の箇所を引用して、ヘーゲルの見解を肯定的に受容する（マルクス『資本論草稿集』①、大月書店の「序説」、52頁）。結局彼は、経済的・歴史的カテゴリーの系列と体系的カテゴリーの系列の照応を基本的に否定する（同上、61頁）。そしてマルクスは、体系的カテゴリーの展開が「近代ブルジョア社会内部の編成」（同上、62頁）によって決定されると述べる。たとえば貨幣から銀行へ、貨幣から賃労働へというように、彼はただ限定的にのみこうした対応を肯定する。

5. 探究過程と叙述過程、ならびに下向法と上向法について

探究過程と叙述過程の差異の問題（『資本論』第二版のあとがき）、およびそれと関連して、いわゆる下向法と上向法についての問題（『経済学批判要綱』序説）は、以前、哲学者のみならず、経済学者によってもおおいに議論されていた。

両方のテーマともそれぞれ興味深いが、しかしいまはほとんど議論されない。というのも、両方とも、二次的な方法論的・科学的な問いであるからだ。私はまず第一に問いたい。両方のテーマ、つまり一方の探究過程と叙述過程、他方の下向法と上向法は、そもそも同じ内容をもっているのだろうか、または異なる内容なのか。報告によれば、この照応は多分、承認されている。私が思うに、この探究の過程は非常に複雑で、ジクザクに進み、または下向し、また上向する。この場合、正確な対応関係は存在しない。そこで同じような内容が見られるとしても、両方のテーマはそれぞれ別の問題を探究しているように私には見える。

6. ドイツ哲学の状況について

私はここで、ただ報告について質問するだけである。対決すべき、20世紀の多様な哲学的な潮流とは何か。とくにドイツで、弁証法的思考がなぜ排除されるのか。現在の人間的かつエコロジ的な危機について、博士はさらにどう考えるのだろうか(S. 19)。そうした情報が獲得できれば、私はとても嬉しく思います。

どうもありがとう。